

トップニュース

飯舘村の村長に就任

杉岡 誠さん (飯舘村・善仁寺住職)



本願寺新報 hongwanji journal

11月10日(火曜日)

毎月1日・10日・20日発行

発行所 本願寺新報社

京都市下京区堀川通花屋町下ル 浄土真宗本願寺派(西本願寺) 本願寺出版社内

〒600-8501 電話 075(371)4171(代) / FAX075(341)7753

来年3月で10年 福島県飯舘村の「今」 東日本大震災からの復興にかけられる人々

東日本大震災から来年3月で10年となる。東京電力福島第一原発の事故で、3年前の4月まで全村避難を強いられた福島県飯舘村は現在、一部地域を除き避難指示が解除されている。村役場に務め、村民と復興への道を歩んできた杉岡誠さん(44、飯舘村・善仁寺住職)が10月27日、村長に就任した。全村民5900人のうち、村で暮らすのは4分の1にも満たない1400人という厳しい現実の中で、杉岡さんに復興にかける思いを聞くとともに、村で復興再生に情熱を燃やす門徒を訪ねて取材した。

杉岡さんは、19年余り務めた役場を今年7月に退職して村長に立候補。6期務めた前村長が引退を表明し、無投票で初当選した。「明日が待ち遠しくなるようなワクワクする楽しい村(ふるさと)の実現に向けて、村民と歩んでいきたい」と決意をみなぎらせる。村を「ふるさと」と読むのには理由がある。原発事故で放射能汚染にみまわれ、避難指示が解除されたのは3年半前。しかし現在、村に戻っているのは1400人。避難者の帰還が大きな課題となっている。「村外に生活基盤を持つ皆さんの心が、村から離れたわけではない。むしろ関われるきっかけを今も探しておられると思う。『ふるさと』というキーワードなら、つながり続けることができる。だから村を『ふるさと』と読む。『真宗宗歌』に『海の内外のへだたなく、とあるように、今は村を離れている村民にもかかわり続けていきたい』と話す。杉岡さんは東京生まれの神奈川育ち。善仁寺は母親の実家である。「小学生の

「ふるさと」を守り、伝える

頃、飯舘村で出会った人の笑顔が大好きで、こういう人たちと将来暮らしたいと作文に書いたことがある。村の人たちは『誠見さんの孫か』とかわいがってくださった」と振り返る。祖父・杉岡誠見住職を継ぐために高校2年生で僧侶に。誠見さんが亡くなり、大学3年で住職となった。東京工業大学大学院で原子核物理を学び修士課程を満了した翌年、25歳で村に1ターニンし、その翌年から村役場に勤め始めた。

震災後は農政を担当した。「原発事故当初は、この地で農業を再生することは絶望的だと思った」と当時を振り返る。農地や宅地などの除染が一定程度完了した3年前、避難指示が解除された。「昨年の米の作付け面積が43ヘクタール。今年は140ヘクタールにまで増えた」と少しずつだが復興の歩みを実感している。今後、情報通信技術(ICT)を取り入れた新しいふるさとづくりや、担い手への農地の集積を図る農地中間管理事業の推進など、営農再開を目指す村民の後押しに努めるという。

「人と自然と風土と歴史が一体となっているのがこの村。それが原発事故によって長い時間分断された。やっと今、再開し始めた。自分の背中を見せたいという先輩世代、自分が先陣を切っていくという若い人もいる。それらの方々がつながって大きな相乗効果が生まれつつある。一番復興が難しい農業分野が前に進んできたのでその灯を消してはならない」と語る。「震災前から、1次産業に携わっている村民の生活は厳しく、決して楽なものではなかった。それでも他人の子どもを自分の子どものようにかわいがり、本堂の尊前の供物が無い日はなかった。村の根幹に流れているのは報恩感謝の心。この村を守っていききたい」と強く語った。

震災以降も、法要は一人でも行ってきた。昨年、報恩講で久しぶりに門信徒が本堂に集った。「周りの景色は変わってしまったが、お寺は昔のまま。皆さんで懐かしく語り合った。私の根本には祖父から受け継いだこのお寺がある。両手を合わせて、ありがとう、おかげさまの心を大切にしていけば、道は必ず開けていく」と未来を見つめる。